

西沢一風作『好色極秘伝』考

—— 浄瑠璃段物集・浮世草子との関連 ——

石 上 阿 希

はじめに

西沢一風の作となる艶本は、管見の限りで『好色極秘伝』と『風流足分船』（宝永七年刊）の二作品を数えるのみである。艶本の初作である『好色極秘伝』に関しては、稀本であることもあり、リチャード・レイン氏が本書の挿絵丁のみを紹介して以降、野間光辰氏が言及された以外ほとんど考察されていない。本稿の底本としたホノルル美術館リチャード・レインコレクション蔵の一本は、本の欠損状態からレイン氏が紹介した本と同一のものであることを確認した。

本書は二部構成となっており、前半の『好色極秘伝』と後半の『丹前枕絵』に分かれている。本稿では、『好色極秘伝』の内、主に後半部分の『丹前枕絵』の成立背景について考察する。『丹前枕絵』は全三十章の短編から成る男女の物語であるが、そのほとんどが浄瑠璃や浮世草子を典拠としている。特に浄瑠璃に関しては、一風が版元として出版していた浄瑠璃段物集との関連

性が強く、中でも『浄瑠璃連理丸』（宝永三年頃刊）から受けた影響を指摘したい。加えて、一風作の浮世草子を踏まえ、浄瑠璃段物集・浮世草子の艶本化としての『好色極秘伝』について考察するとともに、その位置付けを行う。

一 書誌

前述したように、本書に関してはこれまで挿絵丁の紹介のみに留まり、全体的な資料紹介はされていない。そこで、『好色極秘伝』の書誌を記し、本書の構成を確認したい。

版型

横本（半紙本二つ切）。一冊。

表紙

茶色千鳥模様空摺替表紙。縦十・八×横十六・七cm。

題簽なし。左肩ペン書「好色極秘伝」。

本文

四周単辺。縦八・七×横十三・七cm。半丁十五行。毎行十五字前後。（『好色極秘伝』、『丹前枕絵』ともに）

構成

総七十九丁存。

目録一丁（丁付なし）。

「好色極秘伝」十四丁「三十一十六」

「丹前枕絵」六十四丁「いーに」、「二一六十」

挿絵

半丁三十面（ろオ、にオ、二オ、四オ、六オ、八オ、十オ、十二オ、十四オ、十六オ、十八オ、廿オ、廿二オ、廿四オ、廿六オ、廿八オ、三十オ、三十二オ、三十四オ、三十六オ、三十八オ、四十オ、四十二オ、四十四オ、四十六オ、四十八オ、五十オ、五十二オ、五十四オ、五十六オ）
なし。

題簽

目録題

「好色極秘伝」

「好色極秘伝」（三オ）、「丹前枕絵」（いオ）

内題

「好色極秘伝 終」（十六ウ）、「巻終」（六十ウ）

尾題

なし。ノドに丁付あり。

柱題

「好色極秘伝」

句読

「丹前枕絵」「い」丁から「ろ」丁まで「」、以降

はば句読点はなし。

署名

目録末に「西沢与志」。

画者

未詳。

刊記

なし。

書誌備考

丁付「一二」丁欠。目録が実質上の「二」丁にあたる。序文なし。目録三、四丁中央下部一部欠損。

備考

内題には「丹前枕絵」とあるが、目録の章題は「丹前乱絵」。内題の匡郭に切れ目があり、修正を施した可能性が考えられる。

所蔵

ホノルル美術館リチャード・レインコレクション

本書は、全体が「好色極秘伝」と「丹前枕絵」の二部で構成されている。前半の「好色極秘伝」は全十九章の色道指南であり、挿絵はない。後半の「丹前枕絵」は光源氏から樽屋おせん長右衛門までの男女三十組を題材とした本文に、春画の挿絵が付されている。（※以降、本書全体を指す場合は「好色極秘伝」、前・後半のそれぞれを指す場合は「好色極秘伝」、「丹前枕絵」と記す。）

前半部分の「好色極秘伝」と後半部分の「丹前枕絵」が全く異なる内容であるため、もともとは別の本として出されていた可能性も考えられるが、目録の内容は両方を収載した内容となっている。また、「好色極秘伝」の本文中に「▲輪の玉の様子 女悦丸の子細は奥五十七丁目、大きやうじおさんが所にくわしければこ、にて略す▲女善悪屑論の次第は、おくの四十六丁目、けいせい夕ぎりの所にくハしく書しるしければ是又略す▲一義の日取によしあし有事、奥五十三丁目江戸お七の所に、みさいにしるしぬればこ、にて略す▲やりくり秘術の次第、おくの四十九丁目、三かつの所に段々ゆるしおけば、これも略す気をとめ見るべし」とあり、これらの記述が後半の「丹前枕絵」の内容と丁付に

一致することから、本書は一冊の本として体裁を整え、刊行されたものであることがわかる。

刊年については後に詳述するが、結論からいえば浄瑠璃段物集との関連から宝永三年頃と考えられる。

二 「丹前枕絵」の典拠

「丹前枕絵」は、光源氏葵の上から樽屋おせん長右衛門に至るまでの、広範な時代の男女の物語を三十章にまとめている。一章毎の本文は非常に短く、各章に春画の挿絵が付されている。三十章の内、前半の二十四章までは、源氏や義経、曾我五郎十郎といった近世以前に成立した物語上の人物を題材としているが、後半の六章は、夕霧伊左衛門やお七吉三郎などの近世期の実在の人物を題材としている。これらの三十章において、ほとんどの章が浄瑠璃や浮世草子、歌祭文を素材としている。表1は「丹前枕絵」の各章題とその典拠作品をまとめたものである。

現時点で典拠が判明している章は、三十章のうち二十八章だが、一見してわかるように、(1)から(24)までの章が全て浄瑠璃を典拠とし、(25)から(30)までが、浮世草子や歌祭文を典拠としている。本章では、特に(1)から(24)までの浄瑠璃利用についてみていきたい。

「丹前枕絵」の各章は、本文の長さが非常に短い。ほとんどが

一丁半の長さであり、二丁を越える章はない。これらの本文において特徴的なのは、典拠となった浄瑠璃の人物設定や物語展開だけを踏襲するのではなく、ほぼそのまま文辞を利用している点である。中には、一章のほぼ全体が浄瑠璃本文と同じである章もある。ここでは、その例として(4)の「光照いろはの前」を挙げる。本章の典拠となったのは「以呂波物語」(近松作カ、貞享元年三月宇治座初演)の一場面であるが、引用部分が長いため、ここではその一部を比較する。

【以呂波物語】第二

いつぬれそめし。はつこひも。まだ手ならひのいろはのまへ。ゆかしさむねに光照の。思ふはならで思ひもせぬなもいやらしき熊丸が。しみした、るきよれんぼ。すちなきあだなばつとたつ。くもぬの内も。わびしくて。めのとがゆかりありす川。花ちるさとのきりしぼど。みそかにしのびおはします。

「丹前枕絵」光照いろはの前

いつぬれそめし初恋もまだ手習のいろはの前ゆかしさ胸に光照のおもふはならでおもひもせぬなもいやらしき熊丸がしみした、るきよこれんば筋なきあだ名立霞雲のうちもわびしくてめのとがゆかりありす川花散里のきり柴戸ひそかに忍びおわします

わずかな部分に違いは見られるが、「丹前枕絵」が「以呂波物語」をほぼそのまま利用していることが確認できる。「光照いろ

【表1】『好色極秘伝』内「丹前枕絵」典拠表

章題	典拠	談話箇所	典拠種類	時期	初演年月日・刊行年	作者	太夫
(1) 源氏あおひのうへ	あふひのうへ	第一	一部文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年以降・元禄二年以前(全)・貞享初年頃(正)	近松	宇治加賀様
(2) 忌の八柱化の経	天智天皇	第二	文辞の一致	浄瑠璃	元禄二年三月三日(正)・元禄五年三月以前(全)	近松	竹本義太夫
(3) 舞丸をを	せみ丸	第三	文辞の一致	浄瑠璃	元禄一月以前(全)・元禄三年以前(正)	近松	竹本義太夫
(4) 光照いろはの南	以呂波物語	第四	文辞の一致	浄瑠璃	貞享元年七月吉日字治座・同年十月頃竹本座	近松	宇治加賀様
(5) 頼朝あここの南	頼朝伊豆日記	第五	文辞の一致	浄瑠璃	元禄六年一月十八日以前	近松	竹本義太夫
(6) 牛若のり殿	十段	第六	文辞の一致	浄瑠璃	元禄三年三月三日(正)・元禄十一年正月以前(全)	近松	竹本義太夫
(7) 義経若衆	吉野忠信	第七	文辞の一致	浄瑠璃	元禄十一年七月十六日以前	近松	竹本義太夫
(8) 忠臣と菊の前	薩摩守忠度	第八	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年十月以後・貞享四年正月以前	近松	竹本義太夫
(9) 盛久と明ばの	主馬判官盛久	第九	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年七月	近松	竹本義太夫
(10) 佐々木侍宵	佐々木先陣	第十	文辞の一致	浄瑠璃	貞享二年七月	近松	宇治加賀様
(11) 頼朝と弁の君	龜染川	第十一	文辞の一致	浄瑠璃	貞享元年正月以前	近松	竹本義太夫
(12) 品山小六郎とる殿	根元曾我	第十二	文辞の一致	浄瑠璃	元禄十一年正月以前	近松	竹本義太夫
(13) 曾我祐信河津楼家	根元曾我	第十三	文辞の一致	浄瑠璃	元禄十一年正月以前	近松	竹本義太夫
(14) 曾我十郎虎南無	本海道左右	第十四	文辞の一致	浄瑠璃	元禄七年七月十五日以前	近松	竹本義太夫
(15) 三田滝太と橋殿	多田院朝報	第十五	文辞の一致	浄瑠璃	元禄九年頃	近松	竹本義太夫
(16) 信玄新の前	自然居士	第十六	文辞の一致	浄瑠璃	元禄十年七月十五日以前	近松	竹本義太夫
(17) 景清とあこや	出自然居士	第十七	文辞の一致	浄瑠璃	貞享二年の替り	近松	竹本義太夫
(18) 五郎時家少将	曾我九人兄弟	第十八	文辞の一致	浄瑠璃	元禄十五年正月以前	近松	竹本義太夫
(19) 源わたるけと御前	心五成魂	第十九	文辞の一致	浄瑠璃	天和三年九月字治座・貞享元年七月中旬以前竹本座	近松	宇治加賀様
(20) 源しよう	世襲曾我	第二十	文辞の一致	浄瑠璃	太詳	近松	竹本義太夫
(21) 本曾義仲巴	信濃義氏本曾義諸	第二十一	文辞の一致	浄瑠璃	太詳	近松	竹本義太夫
(22) 頼家公熊谷太師	田原又太郎熊田前	第二十二	文辞の一致	浄瑠璃	太詳	近松	竹本義太夫
(23) 田原又太郎熊田前	大友兵衛	第二十三	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年・元以前	未詳	竹本義太夫
(24) すくねのかね玉水盛	中巻・屋敷	第二十四	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(25) けいせい夕霧伊左衛門	下巻・会交通曲之妙述	第二十五	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(26) 女舞・跡あかねや半し	好色調羹図案	第二十六	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(27) 連直実在	八達尼松し松文	第二十七	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(28) 江戸のおおし吉郎	好色調羹図案	第二十八	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(29) 江村のおおし吉郎	好色五人女	第二十九	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(30) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第三十	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(31) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第三十一	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(32) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第三十二	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(33) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第三十三	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(34) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第三十四	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(35) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第三十五	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(36) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第三十六	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(37) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第三十七	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(38) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第三十八	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(39) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第三十九	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(40) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第四十	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(41) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第四十一	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(42) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第四十二	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(43) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第四十三	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(44) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第四十四	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(45) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第四十五	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(46) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第四十六	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(47) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第四十七	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(48) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第四十八	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(49) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第四十九	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫
(50) 大経師おとく彦兵衛	好色五人女	第五十	文辞の一致	浄瑠璃	貞享三年三月	吉田平兵衛	竹本義太夫

※(27)「連直実在」に同じ「は、野間光氏氏の指摘による
 ※典拠が「浄瑠璃」であるもの内「初演年月日」・「作者」は「近松全集」「吉波書店」・「正本近松全集」「鹿嶋社」・「竹本義太夫浄瑠璃日本集」(大学堂書店)・「名作浄瑠璃集」(日本名著全集刊行会)に拠った。また上演年月日に異なる説のあるものは、後者に(全)・(正)と付け区別した(全)は「近松全集」・(正)は「正本近松全集」に拠ったことを示す

はの前」の章ではこのような利用が一章全体で行われており、細部が異なる程度である。

中には浄瑠璃との文辞の一致が部分的な章もある。それらの章では、浄瑠璃の本文を土台として、一風がそれを中略したり、結末部分を描き加えるなどの細かい改変を行っている。(11)「頼澄と弁の君」はその一例である。本章では、『藍染川』(近松作カ、貞享元年七月宇治座初演、同年同月以降竹本座初演)の浄瑠璃本文を中略しつつ、それらをつなげて文章を構成している。場面は、頼澄が北野社に参詣した折に、弁の君と出会うところである。次にそれぞれを比較し一風の浄瑠璃利用の方法をみていきたい。

『藍染川』第一

頼澄一め御覧じてこはそも人か。天人かとうかと。見とれししなかたち。べんもうつゝのこゝ地して。うはべばかりは見ずしらず心とこゝろとをりあひ。じつとめでしめきでしめてたがひにしのぶ恋しりの。

『藍染川』第二

花やを恋のやどりにて。たびかさなりしかりまくらふかきいもせと成給ふ。

『丹前枕絵』頼澄と弁の君

頼澄を一目みてうはべばかりはみずしらす心と心をとよりあはせじつと目でしめきでしめて花屋を恋のやどりにてたびかさなりしかり枕深いもせと成給ふ

傍線部①、②をそれぞれ比較すると、一風が『藍染川』の本文

から抜き取った文辞を細かく切り貼りしていることがわかる。場面の異なる『藍染川』の第一と第二を連結し、一つの場面に変更しており、二人の出会いから逢瀬までを描いている浄瑠璃本文の詳細な描写を省略し、話の軸となる部分のみを抜き出している。更に、『藍染川』では弁の君に根笹と紫竹という二人の腰元が仕えているという設定を、紫竹一人に変更している。約一丁半という短い本文の中で話を展開させるために、設定の簡略化を図っているといえる。

また、(20)「虎しやうく」では浄瑠璃の趣向を艶本の設定に転じている。本章は『世継曾我』(近松作、天和三年九月宇治座初演)を利用する。この場面は、大磯の虎と化粧坂の少将が、曾我兄弟の母の為に兄弟の形見の衣裳を身に纏って二人に成りすますところである。本章では、本文の大部分が『世継曾我』からそのまま文辞を利用してあるが、最後の箇所のみ浄瑠璃の趣向を活かしつつも、改変を加えている。

『世継曾我』第三

扱いかゞせん何とかと。しばし思案し給ひしが。ヲ、思ひ付たり有しよの。形見のゑぼしひた、れを。虎少将に打きせて暫是にましますと。

『丹前枕絵』虎しやうく

先それ迄にあいたいかと御用の一もつ取出し兄弟のゑぼしひたたれを着しとらが五郎となれば少将は十郎と成かわり入かはり友喰こそはしられけり

二人が十郎・五郎それぞれの形見を着るところは一致するが、「丹前枕絵」では、虎と少将がお互いを慰め合う展開となる。

このように浄瑠璃本文をそのまま利用するだけでなく、設定を簡略にすることで短い本文の中に浄瑠璃の見所を納め、浄瑠璃の趣向を艶本表現として変換させる点に、一風の編集をみる事が出来る。

また、浄瑠璃の影響は「丹前枕絵」の本文だけでなく、挿絵にもみられる。(13)「曾我祐信河津後家」の挿絵は、それが端的に表れた章である。本章は、『根元曾我』(近松作カ、元禄十一年正

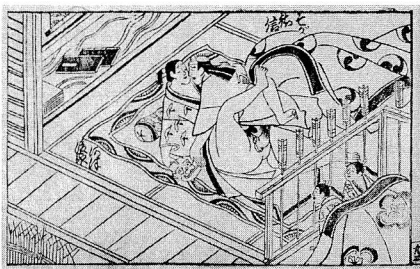


図1「丹前枕絵」廿二丁表



図2「丹前枕絵」廿六丁表

月以前初演)の第三を典拠としている。『根元曾我』の該当場面のあらすじを以下に記す。

曾我祐信は河津の後家とその二人の子どもを引き取る。しかし祐信は夫婦となって同じ家に住みながらも、河津の後家と枕を交わさない。そこで後家は般若の面をかぶり、祐信の枕元にたち思いを遂げようとする。それを二人の子どもが襖の隙間から覗き見る。

「丹前枕絵」の挿絵(図1)は、その場面を描いたものである。般若の面を持った後家と祐信との床入りを立てかけた矢の間から二人の子どもが覗いている。しかし、「丹前枕絵」の本文には子ども二人が寝所を覗く記述がない。以下に『根元曾我』と「丹前枕絵」それぞれの該当箇所を挙げる。

『根元曾我』第三⁷

のちはたがひにしらけあひ。どつとわらふがなかだちにてね
やはひとつになりにけり。(中略) きやうだいいもろ共さしあ
ししふすまのそばに立より。あにはをと、にあれみよとをし
ゆるゆびがをと、の。はこわうがめにあたりに

「丹前枕絵」

後には互にしらけあひどつと笑て久かたの枕はづして鼻息は
物もいはれぬむまい床入^{なぐりいり}

「丹前枕絵」の本文は、この部分で終わり、『根元曾我』の傍線部分にあるような、兄弟二人が寝所を覗く場面は省かれている。挿絵には、般若の面や、幽霊の格好をした祐信など特徴的なもの

が描かれているが、それらについては「根元曾我」と「丹前枕絵」の両方の本文に記述がある。これらのことから、絵師が挿絵を描く際に、一風の本文だけでなく、浄瑠璃本文も参考にしていただとがわかる。

同じ様な例が(15)「三田源太と橘姫」である。本章は、「多田院開帳」(近松作カ、元禄九年頃初演)の一場面を典拠としている。男勝りの橘姫が、山に籠もり愛染明王に自分に相応しい男の出現を願うところへ三田源太が遭遇する場面である。挿絵には、画面右上に松に掛けられた愛染明王の絵、中央に源太と橘姫、左に松枝に掛けられた生首が描かれている(図2)。以下に該当場面のそれぞれの本文を挙げる。

【多田院開帳】第一

いはのはざまに身をかくしいろをゑかけるあいぜんの。ゑざうをかたへの小松にかけかうげとうみやうぐもつをそなへ。
一ちやうあまりの手ばこをつきふりそでしほる玉だすき。
(中略)あたりのこずゑくには。なまくび四五十かけならべゑしやくしてこそ立たりけれ。

【丹前枕絵】三田源太と橘姫

岩いわのはざまに身をかくしあいぜん明王みんわうの像を松にかけ一丈斗さうたうの手ばこをつきふり袖しほる玉だすき

愛染明王の絵に関しては、「多田院開帳」本文傍線部に「あいぜんの。ゑざうをかたへの小松にかけ」とあり、「丹前枕絵」の本文傍線部にも「あいぜん明王の像を松にかけ」と記述されている

ることが確認出来る。しかし、生首については「多田院開帳」本文の傍線部に描写があるが、「丹前枕絵」には該当箇所がない。本章の挿絵も図1の例と同様に、「丹前枕絵」本文に欠けている要素を挿絵が補っているといえる。

これらの挿絵は、一風の本文ではなく、浄瑠璃の一場面のイメージをなぞっている。挿絵が一風の指示で描かれたのか、絵師の判断で描かれたのかは明らかではないが、いずれにせよ、挿絵は浄瑠璃に影響を受けているといえる。「丹前枕絵」の制作の傍らには、常に浄瑠璃本文の存在があつたのである。

三 成立背景

(1) 浄瑠璃段物集との関連

表1の「丹前枕絵」典拠表の太夫欄に注目すると、竹本義太夫・筑後掾の語った浄瑠璃が多いことがわかる。これは、当時一風が版元正本屋九左衛門として関わっていた竹本浄瑠璃段物集の影響によると考えられる。西沢版竹本浄瑠璃段物集は、現在確認出来ている限りで次の六点がある。

【竹本如意宝珠】元禄十二年前刊(東京大学附属図書館蔵)

【浄瑠璃見取丸】元禄十五年末頃刊(大阪教育附属大学図書館蔵)

【竹本秘伝丸】宝永二、三年頃刊(愛知県立大学、大阪大学忠頂寺文庫蔵)

【浄瑠璃連理丸】宝永三年頃刊(東京大学附属図書館霞亭文庫蔵)

『浄瑠璃花月丸』宝永三年頃刊（信多純一氏蔵）

『竹本極秘伝』宝永年間刊（天理大学附属天理図書館蔵）

（※以降書名の記述は「竹本」・「浄瑠璃」を省く）

浄瑠璃段物集は用途によつて様々な版型のものが出されていたが、元禄末頃から横小本の「竹本・流懷中本」と称される段物が多種刊行されるようになる。

但し、西沢版の段物集の内、『見取丸』と『秘伝丸』は、山本九兵衛・九右衛門版の段物集との関連が強い。阪口弘之氏は、山本版『浄瑠璃調子竹』に収載されている浄瑠璃全二十六番と『見取丸』全二十七番とは、二十六番が一致する上に、十四番以降は収載順序も同じであると指摘している。また、大橋正叔氏は山本版『浄瑠璃拍子扇』全二十八番と『秘伝丸』全二十八番では、二十五番が一致し、曲の配列も類似していることを指摘している。つまり、西沢版は山本版に強い影響を受けていたのである。

山本版『浄瑠璃小菊丸』（宝永二、三年頃刊）の竹本筑後掾による序文には、山本版段物集を流用した本への批判が記されている。

小ぎく丸、ミとり丸、ひでん丸此三艘の道行揃ハ、予が秘密のふし章の規矩を以て、是を正し集め、山本氏に板行に彫しめ、音曲の海をわたる楫棹とする所に、頃日あしれぬ類船出て、書の題号をとり付て正本をかすむといへども、

西沢版の段物集が、山本版段物集をほぼそのまま踏襲している

ことを考えれば、ここでの批判の対象「あしれぬ類船」が西沢版段物集であることは十分考えられることである。『見取丸』、『秘伝丸』は西沢独自のものではなく、山本版に負うところが非常に大きかったといえる。

しかし、一風は『連理丸』以降の段物集では、山本版の流用を行っていない。特に『連理丸』では、それまでの山本版を踏襲した段物集が道行を中心とした編集であったのに対し、『恋慕段物揃』という新しい趣向を打ち出している。これは、浄瑠璃の段の中でも、「しのびの段」や「ぬれの段」といった男女の濡れの場面を選出したもので、一風はこれらの段を「浄瑠璃のまなこ也」と位置づけている。これに対し、大橋氏は「他の段物集と比してこの『連理丸』の選曲は異例といえる」と述べ、奇を衒いすぎていると評価する。また、このような『連理丸』の編集方針については「山本の重流から抜け出ようとした結果というより段物集としての選曲の困難さが招いた苦肉の策ではなかったか」と指摘している。この指摘通り、道行を中心とした段物集は既に出尽くしており、新しい段物集を作るためには新たな選曲の特色がなければならなかった状況が、「恋慕段物揃」という趣向をとる本書の背景にあったと考えられる。

しかし、苦肉の策とされたこの趣向を、一風は「丹前枕絵」でも用いており、この時期において一つの手法として試行錯誤していたのではないとも考えられる。『連理丸』と『好色極秘伝』

には刊記がないため、両書の前後関係を明らかにすることは出来ないが、いくつかの点から、『好色極秘伝』が『連理丸』或いは浄瑠璃段物集から影響を受けているということが指摘出来る。

第一に、『好色極秘伝』が段物集の形式を取り入れている点が挙げられる。この時期の西沢版段物集の版型は、「懷中本」と称される横小本のものが主流であるが、『好色極秘伝』もこれらとほぼ同じ大きさ（十・八×十六・七^{cm}）である。元禄末から宝永初めにかけての八文字屋版浮世草子や一風作の浮世草子が約十二×十八^{cm}の横本であることと比較すれば、本書が段物集によせて造本していることが分かる。

更に丁付の表記も、西沢版段物集独自の形式を踏襲している。西沢版の特徴として、丁付に「いろは」を使用する点がある。『如意宝珠』、『見取丸』、『秘伝丸』、『連理丸』では、本文丁は「い」から始まり、途中から数字の丁付に変わる。「丹前枕絵」も同様に本文開始丁から四丁目までは、「い」、「ろ」、「は」「に」の丁付であり、以降から数字の丁付になる。

その他に、本文には段物集に見られるような節付けを施していないが、目録や本文中の章題の書き方も段物集の形式を模しており、「段物集の艶本化」という一風の意図を読み取ることができる。

第二に、「恋慕段物揃」という趣向の一致が挙げられる。浄瑠璃の濡れの段を抜き出すという趣向が一致しているため、『連理丸』と「丹前枕絵」とでは、典拠としている浄瑠璃と場

面が一致する章が八章ある。このことは、『見取丸』全二十七章の内、「丹前枕絵」と利用箇所が一致するものが一章であること、同様に『秘伝丸』全二十八章の内、一致するものが一章もないことと比較すれば、『連理丸』と「丹前枕絵」の関連が非常に強いことがわかる。

前章でみたように、「丹前枕絵」の（1）から（24）章まで、浄瑠璃を題材としており、細かい改変はあるものの、ほぼそのまま浄瑠璃本文を利用している。いわば本書は「恋慕段物揃」に春画の挿絵を付した作品であるといえる。浄瑠璃段物集の選曲方針として「恋慕段物揃」を打ち出した一風は、その趣向をそのまま艶本に用いたという流れがあるのではないだろうか。

しかし、この趣向は『連理丸』以降の段物集には用いられていない。『花月丸』、『極秘伝』はともに寄せ本であり、一書全体には統一された編集方針はみられない。『連理丸』で浄瑠璃十五曲の恋慕の段を選出し、「丹前枕絵」において八曲は重なるものの、三十曲の恋慕の段を選び出したことで、「恋慕段物揃」の趣向はある程度やりきったとも考えられる。いずれにせよ、『好色極秘伝』の背景には正本屋としての一風の活動があり、一風が本書を浄瑠璃段物集の艶本化として制作したことがいえる。

『好色極秘伝』の刊年について、レイン氏は元禄十二・三年頃としている¹⁷。刊年の根拠については明確に示してはいないが、『前の作』（※稿者注 二代吉田半兵衛画「好色後家咄し」）レイン氏は元禄三年頃と推定）から十年おくれて出現したこの小草子は、顔

と人物が誇張されており、これが、この作者の晩年の特徴となつてくる」とあることから、おそらく二代半兵衛の筆致から判断したものと考えられる。野間光辰氏はこのレイン氏の説をひいて、本書を『初期浮世草子年表』の元禄十二年の項に立項している。

しかし、『丹前枕絵』が典拠とした浄瑠璃の内、初演年次が最も遅いのが、元禄十五年正月以前の「一心五戒魂」である。このことから、本書の成立は元禄十五年をそれほど遡らないと考えられる。更に、宝永三年頃刊行の『連理丸』と関連性が強いことを踏まえれば、本書の刊行もほぼ同時期の宝永三年頃と考えることが妥当であろう。

(2) 浮世草子との関連

一方(25)から(30)は、歌祭文や浮世草子を典拠としている。しかし、これらの章では典拠作品の文辞や筋の利用は一部だけであり、章の後半は性薬の使い方や床入りの方法などの色道指南になっているものが多い。例として(29)「大経師おさん茂兵衛」をみてみよう。本章の前半は『好色五人女』巻三を典拠としている。

『好色五人女』巻三

爰に大経師の美婦とて、浮名の立つき、都に情の山をうごかし、祇園会の月鉾、かつらの眉をあらそひ、姿は清水の初桜、いまだ咲かゝる風情、口びるのうろはしきは高尾の木末、色の盛と詠めし。

『丹前枕絵』大経師おさん茂兵衛

天和二年のはるがすみ大経師何がしが妻おさんといふはかくれなき美婦ひろき都にて浮名の立つき情の山をうごかし祇園会の月はこの光にまゆをあらそひすがたは東山の初桜いまださきかゝらぬ風情口びるは高尾の木末色の盛と詠し身なれど

細かい改変は加えられているが、ほぼそのままを利用していることがわかる。「丹前枕絵」の本文はこの後、『好色五人女』や歌祭文などで知られるおさんも兵衛のあらすじを艶色を加えて展開させる。後半では茂兵衛がおさんに床入りの口伝をするという体裁で、先行する作品から題材を得て色道指南の文章をまとめている。

『好色旅枕』下(貞享四年頃刊)

○よがり薬の事

一、女悦奇妙丸にようかつみょうくわん あはれしめふくしう

にんじん ぶし

りうこつ いかのかう

さいしん さんせう

みやうばん じやかう

ちやうじ せきりうひ

こしつ につけい

右此十二色を粉にしてみづにそくいか又はもちのりをすこしませあはせむくろじの大ききほとに丸じておこなはんとおもふまへかどに玉門の中へ入べし

〔せ筆染めて〕延紙の綴文あたまから。

〔寛潤曾我物語〕六卷一

庵木香のかけひなた二つ鏡に影うつす。月雪花は何やらん。

見たいは彼人ぞとみづから鏡取置。硯にむかい筆くいしめ。

心の底を書ながす。野辺の閉文あたまから。

〔丹前枕絵〕曾我十郎虎御前

いほりもかうのかけひなた二つ鏡に影うつす見たいは人の面影と硯ひきよせ筆を染野辺の閉ぶみあたまから

これらの傍線部分及び囲み部分を比較すると、『寛潤曾我』が『北海道虎石』の本文を若干改変し、更に文辞を書き足しているのに対し、「丹前枕絵」は『北海道虎石』の本文を省略することはあっても書き加えることはしていないことがわかる。一風は「丹前枕絵」の本文を自身の作品である『寛潤曾我』からではなく『北海道虎石』に拠っており、これら一風の二作品の関連は、同じ作品を典拠としているために、文辞が一致したに過ぎない。しかし、同時期の浮世草子と同じ題材を選び、利用する箇所まで同じであることを考えれば、一風が浮世草子制作の方法を艶本制作にも応用していたといえるだろう。

一風が、浮世草子の制作において先行する浄瑠璃・歌舞伎、浮世草子から題材や本文の利用を行っていることは、諸学の指摘するところである。井上和氏は、このような広範囲に亘る素材の利用について、一風が浄瑠璃・歌舞伎・歌謡関係の書物を主に扱

う正本屋であったことが大きく影響していることを述べているが本書に關しても同様のことがいえる。本書が典拠としている様々な書物を通覧すれば、一風の正本屋としての環境がわかると同時に、浮世草子作者として、周辺にどのような書物が置かれていたのかを窺い知ることが出来るのではないだろうか。

おわりに

ここまで、『好色極秘伝』の内「丹前枕絵」の典拠及び成立背景に、浄瑠璃段物集や浮世草子などが存在していたことを考察し、正本屋あるいは浮世草子作者としての一風の活動が艶本制作に大きな影響を及ぼしていたことを明らかにした。

また、本書前半部分の「好色極秘伝」が色道の指南書になっている点にも注目したい。一風は浮世草子制作以前に『茶屋諸分調法記』（元禄六年二月刊）と、その解題増補本である『色茶屋頻卑顔』（元禄十一年三月刊）を刊行しており、床入りの方法や性薬の使い方などの知識は十分に備えていた。『色茶屋頻卑顔』と「丹前枕絵」には重なる部分があり、「好色極秘伝」もまた、その知識を活かしたものである。

これらのことを踏まえれば、『好色極秘伝』の構成要素は全て一風が以前に關わってきた作品が基になっているといえる。正本屋としての浄瑠璃段物集の出版から「恋慕段物揃」の着想を得た一風は、浄瑠璃に加え歌祭文や浮世草子などの既存の物語から場

面を選び抜く「段物集」の艶本として「丹前枕絵」を制作し、それに色道指南の「好色極秘伝」を加えて完成させたのではないだろうか。本書は一風の艶本初作であるが、その内容は元禄末から宝永初期における一風自身の出版活動の集約ともいえるのである。

注

(1) リチャード・レイン「元禄の上方艶本Ⅱ」(『季刊浮世絵』七十八号、昭和五十四年、画文堂)、「元禄のエロス半兵衛・七郎兵衛上方名品艶本集」(『季刊浮世絵』別冊、昭和五十四年、画文堂)

(2) 野間光辰『浮世草子集』解説(日本古典文学大系91、昭和四十一年、岩波書店)、『初期浮世草子年表』近世遊女評判記年表(日本書誌学大系40、昭和五十九年、青裳堂書店)

(3) 『好色極秘伝』内「好色極秘伝」目録

「好色極秘伝」目録／一 男女養性論／二 床入惣論／三 玉門出入当論／四 本手術／五 馬乗術／六 抱上術／七 後掛術／八 末代術／九 枕合術／十 茶臼術／十一 腹合不術／十二 陰翳術／十三 横合術／十四 寸法浅深論／十五 床入五法論／十六 秘事薬方伝／十七

玉莖善悪論／十八 道具用術論／▲ 輪の玉の様子／▲ 女悦丸の子細／▲ 女善悪床入の次第／▲ やりくり秘伝書／▲ 一義せざる日取／右四色は奥の巻にくわしく記す／十九 交合十種妙／二十 丹前乱絵 三十対入／西沢与志」

(4) 本文は「近松全集」第十三卷(平成三年、岩波書店)に拠る。

(5) 本文は「近松全集」第一卷(大正十四年、朝日新聞社)に拠る。

(6) 本文は「近松全集」第一卷(昭和六十年、岩波書店)に拠る。

(7) 本文は「竹本義太夫浄瑠璃正本集」上巻(古浄瑠璃正本集刊行会、平成七年、大学堂書店)に拠る。

(8) 本文は「竹本義太夫浄瑠璃正本集」上巻(古浄瑠璃正本集刊行会、平成七年、大学堂書店)に拠る。

(9) 浄瑠璃段物集の刊年に關しては、「竹本如意宝珠」は酒井わか奈「横本型義太夫節段物集考」(『平成十四年度日本近世文学会秋季大会』発表レジュメ)、それ以外は大橋正叔「竹本一流懷中本について」(『大阪大学 語文』三十二号、昭和四十九年九月)に拠る。

(10) 前掲(注9)大橋氏論文に同じ。

(11) 阪口弘之「佐藤忠信廿日正月」解題(『竹本義太夫浄瑠璃正本集』下巻、平成七年、大学堂書店)

(12) 前掲(注9) 大橋氏論文に同じ。

(13) 本文は『日本庶民文化史料集成』七卷人形浄瑠璃(昭和五十年、三一書房)に拠る。

(14) 前掲(注9) 大橋氏論文に同じ。

(15) 八文字屋本の大きさに關しては『八文字屋本全集』一卷(八文字屋本研究会、平成四年、汲古書院)、一風作の浮世草子に關しては『西沢一風全集』二卷(西沢一風全集刊行会、平成十五年、汲古書院)に拠る。

(16) 前掲(注9) 大橋氏論文に同じ。

(17) 前掲(注1)に同じ。

(18) 前掲書(注2)『初期浮世草子年表』に同じ。

「×好色極秘伝 横本一冊ノ刊記を欠く。レーン氏説に、元禄十二・十三年頃刊、二代目半兵衛画かといふ。」

※(稿者注 書名前の「×」印は野間氏が直接原本に就くことを得ず、他書の記述によって著録したことを示す。)

(19) 時松孝文「一心五戒魂」解題(『竹本義太夫浄瑠璃正集』下巻、平成七年、大学堂書店)

(20) 本文は『西鶴集』上(日本古典文学大系47 昭和三十一年、岩波書店)に拠る。

(21) 本文は「覆刻・旅枕」下(『会本研究』17号、昭和五十八年十月)に拠る。

(22) 『好色旅枕』には貞享四年頃刊行された上方板と、それに序と挿絵を新たに加えた江戸板(元禄八年刊)がある。

『会本研究』(十六・十七号、昭和五十八年二月・十月)

で翻刻紹介されたものは江戸板である。上方板が現在所在不明のため、一風がどちらを参考にしたのかは明確ではないが、おそらく上方板であったと思われる。また、『好色旅枕』は、『好色訓蒙図彙』の一部をそのまま利用している箇所があるが、(29) 大経師おさん茂兵衛の典拠となっている箇所は、『好色旅枕』独自の本文である。

(23) 長谷川強『浮世草子の研究』(昭和四十四年、桜楓社)

(24) 前掲書(注2)『浮世草子集』に同じ。

(25) 本文は『浄瑠璃名作集』上巻(日本名著全集六卷、昭和二年、日本名著全集刊行会)に拠る。

(26) 本文は前掲書(注15)『西沢一風全集』二卷に拠る。

(27) 井上和人『御前義経記』における「浄瑠璃御前物語」利用―使用本文の推定と執筆環境―(『江戸文学と出版メディア―近世前期小説を中心に』所収、平成十三年、笠間書院)

(28) (注3) 参照。

付記

本稿は平成十九年度第二十七回日本文学協会研究発表会(於中京大学)における口頭発表に基づくものである。席上にてご教示を賜りました佐伯孝弘氏、神谷勝広氏は

じめ、発表後にご指導下さいました大橋正叔氏、廣瀬千紗子氏に、厚く御礼申し上げます。また、資料の掲載をお許し頂いたホノルル美術館に、末筆ながら深謝申し上げます。

(いしがみ・あき 本学衣笠総合研究機構PD)